

[原著] 松本歯学 14:66~74, 1988

key words: 智歯 - 萌出異常 - 処置 - 統計

歯科臨床実習学生における第三大臼歯 の推移について 第IV報

賀数 恵, 田代和久, 河田直彦, 村上浩子
伊藤良彦, 藤田 研, 佐藤 透, 内田栄三郎
徳植 進

松本歯科大学 総合診断学・口腔外科学講座 (主任 徳植 進 教授)

Transition in the Number of Wisdom Teeth of Matsumoto Dental
College Undergraduate Clinic Students Part IV

KEI KAKAZU, KAZUHISA TASHIRO, NAOHIKO KAWATA
HIROKO MURAKAMI, YOSHIHIKO ITO, KEN FUJITA
TOURU SATO, EIZABURO UCHIDA, MACHIKO MARUMO
and SUSUMU TOKUUE

*Department of Oral Diagnostics and Surgery, Matsuroto Dental College
(Chief : Prof. S. Tokuue)*

Summary

We have investigated the transition of the third molar, or wisdom teeth, of undergraduates students at our college during the academic year, 1985-1986. These data were compared to previous reports compiled from 1977 to 1984.

- 1) The four wisdom teeth were symbolically represented in sixteen combinations; $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$
 $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$.
Cases where all four teeth erupted ($\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$) or where no teeth erupted ($\begin{matrix} - & - \\ - & - \end{matrix}$) were common, while cases of only one tooth erupting in each jaw ($\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$, $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$, $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$, $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$) were rare.
- 2) There appears to be no relationship between a tooth's eruption and its visibility on x-ray film. On the average, one tooth seen on the x-ray film will erupt.
- 3) According to the data from 1977-1984, 4.4% of all erupted teeth had incomplete root apices, compared with 3% for the 1985-1986 sample. However, of completely impacted teeth, the percentages increased from 24% to 46%, respectively.
- 4) The inclination of the wisdom teeth examined was mostly vertical in the maxilla, while it was mesial or horizontal in the mandible. This inclination was similar to that in

previous reports.

- 5) The percentage of the wisdom teeth restored was higher than that of the previous reports. The number of teeth restored by resin filling, were 16. In contrast, none were seen in previous reports.
- 6) The percentage of unerupted teeth other than wisdom teeth was 1.1% which is less than the 3.7% in previous reports. Completely impacted teeth other than wisdom teeth were 9 out of 266 people studied. This number is less than that in the previous reports, which was 21 in 1287 people, but the percentage is higher.
- 7) The percentage of extracted wisdom teeth was 22.0% (135 out of 613), which was almost similar to the percentage of 19.7% (613 out of 3110) shown in the previous reports, It is important to note that 130 wisdom teeth out of 135 were extracted without anti-inflammatory treatment during dental clinical training.
- 8) The percentage of extracted wisdom teeth with vertical inclination was 64.5% (404 out of 626). This percentage is similar to that of 63.7% (1981 out of 3110) shown in previous reports.

結 言

本題に関する報告は、すでに、第I報¹⁾(昭和52、53、54年度-429名、智歯1,044歯)、第II報²⁾(昭和55、56、57年度-581名、智歯1,428歯)、第III報³⁾(昭和58、59年度-277名、智歯638歯)として、その調査結果を発表してきた。今回は、これにひきつづき、昭和60、61年度の臨床実習学生266名、智歯626歯の一年間にわたる推移を括め得たので、前報と比較し、ここに報告する。

調査対象および方法

調査対象は本学臨床実習学生、第9、10期生、計266名(♂225名、♀41名)で、調査資料として、カルテ、オルソパントモ像、デンタル像、口腔内カラー写真、ならびに上下顎石膏模型をとりあげ、実習開始時と終了時を比較検討し、かつライター立会のもとで直接確認を行ったものである。

今、それぞれの調査基準を略記すると次のごとくである。

1) 被検者における智歯の存在、萌出状態をレ線像にのみ診られるものと、口腔内にて視診観察されるものとに二別し、さらに、これを部位別萌出の組合せにしたがい16分類している。

2) 萌出歯、半埋伏および完全埋伏歯の判定は上下顎石膏模型、口腔内カラー写真、カルテ記載をもとに分類した。すなわち、歯冠全部が口腔内に現われているものを萌出歯、歯冠一部のみ見せ

るものを半埋伏歯、歯冠部が歯肉下、または骨内にあるものを完全埋伏歯としている。

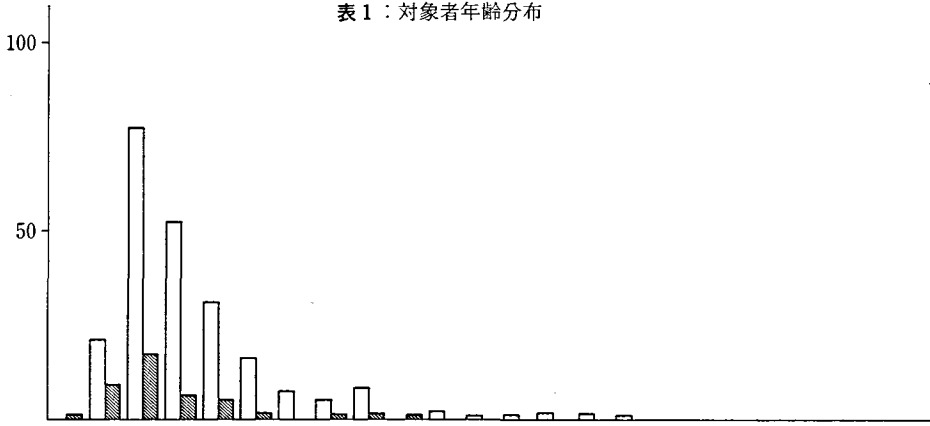
3) 智歯の傾斜による分類は、河本⁴⁾の傾斜角度測定法に準じた。すなわち、オルソパントモレ線像上における各歯の咬頭頂を結んだ線(前方歯欠損の場合は、歯槽頂線、あるいはこれを平行した仮想線)に垂線をおろし、この垂線に対する智歯長軸の示す角度を測定したものである。この基準にしたがって下顎では、近心側 $+30^{\circ}$ ~遠心側 -10° の間を垂直域としてあつかい、それ以上の角度を示すものを近心傾斜および水平、それ以下のものを遠心傾斜として、処理分類してある。また、上顎では、 $+10^{\circ}$ ~ -30° を垂直とし、それ以上を近心傾斜および水平とし、それ以下を遠心傾斜と分類した。なお、上下顎とも、頬、舌側に傾きを示しているものを合せて、頬・舌傾斜としてあつかった。

4) 根の完成、未完成の分類は、レ線像上にて根尖の狭少閉鎖を診たものを完成とし、根尖部が未だ開孔状態にあるものを未完成としてある。

5) 智歯の処置状態は、充填処置、冠装着、架橋義歯の支台と別け、それぞれを部位別に記載した。

6) 智歯以外の埋伏歯、先天欠如については、カルテ記載にもとずき、オルソパントモや、形態で確かめたが、なかには歯牙名を決定しにくいものもあり、特に下顎前歯、ならびに上下顎小臼歯部などでは鑑別に困難を覚えたので、その部位名

表1：対象者年齢分布



第IV報	年齢	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	計
	♂	0	21	77	52	31	16	7	5	8	0	2	1	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0
♀	1	9	17	6	5	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41
計		1	30	94	58	36	7	6	9	1	2	1	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	266

第III報	年齢	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	計
	♂	150	448	244	116	55	33	25	10	14	11	6	7	3	3	2	0	1	1	1	0	0	1	1131
♀	49	74	19	11	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	156
計	199	522	263	127	55	33	27	10	15	11	6	7	3	3	2	0	1	1	1	0	0	1	1287	

を付し取扱った。

調査結果

1. 対象学生の数とその年齢分布

学生数は計266名で、表1のごとく、♂225名、♀41名、その年齢分布は、約82%が23~26歳に占められていた。

2. 部位別智歯の存在と萌出状態

智歯存在の部位別組合せを16分類した場合、表2のごとき(縦軸はレ線の上に認められたもの、横軸は口腔内萌出歯を、各々○で示し萌出状態を現わした)結果をみている。すなわち、

A) レ線所見で智歯の存在をみるものは、 $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ ……71例、284歯で、そのうち135歯が萌出しており、しかし $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ 上下左右全智歯が萌出しているものは14例と少なかった。これに対し、全く萌出していない智歯存在は17例を数えた。このほか多くみられた組合せは $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ ……30例で、うち全て萌出しているもの8例、すべて萌出していないもの18例を数えた。また、ごく少ない組合せは、上下左右対角線上に存在していた $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ ……1例、 $\begin{matrix} \circ & \circ \\ \circ & \circ \end{matrix}$ ……5例をみたものである。

B) 部位別智歯の計は、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……152歯、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……95

歯、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……160歯、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……165歯であった。上下顎比、左右側比、共にほぼ同様に存在を示していた。

C) 部位別智歯の傾斜(表3)

上顎 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ では、近心傾斜および水平…41歯、垂直…245歯を示し、下顎 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ では、近心傾斜および水平…124歯、垂直159歯を示し、上下顎とも垂直に位置する歯牙が多くみられている。また、遠心傾斜は、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……6歯、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……7歯を、頬・舌傾斜は $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……9歯、 $\begin{matrix} \circ \\ \circ \end{matrix}$ ……35歯を示し、特に下顎智歯に多い傾向がみられた。

D) 根の完成、未完成と萌出状態

根尖状態の不詳例2歯を除くと、約80%(497歯/624歯)に根の完成をみている。すなわち上顎では、約75%(224/300歯)、下顎では約84%(273歯/324歯)を示していたものである(表4)。また、さらに萌出歯と完全埋伏歯との差が、根の完成、未完成とどの程度、関連しているかを比較したところ、萌出歯295歯中286歯、半埋伏歯120歯中99歯に根の完成をみたのに対し、完全埋伏歯209歯中では、根の完成は112歯、未完成97歯の結果をみている。明らかに萌出歯に根の完成が多いことを認めた(表5)。

3. 智歯の保存、補綴的処置(表6)

表2：部位別智歯の存在と萌出
萌出歯

	$\frac{10}{10}$	$\frac{11}{11}$	$\frac{12}{12}$	$\frac{13}{13}$	$\frac{14}{14}$	$\frac{15}{15}$	$\frac{16}{16}$	$\frac{17}{17}$	$\frac{18}{18}$	$\frac{19}{19}$	$\frac{20}{20}$	$\frac{21}{21}$	$\frac{22}{22}$	$\frac{23}{23}$	$\frac{24}{24}$	計	第I~III 合計	
	14	4	5	2	1	11	3			1		5	8			17	71	407
		3				3		1					3			1	11	59
			5			6							2			2	15	68
							2					6				6	14	54
					6		1		4	1			1			3	16	61
レ						6						1	3			9	19	84
線							8								3	1	18	30
上								2				1		1		4	8	19
の									2						2	3	7	25
歯											1						1	14
												3	1			1	5	20
													4			5	9	31
													4			5	9	31
														1		8	9	58
															4	3	7	52
																35	35	174
計	14	7	10	2	7	26	14	3	6	3	3	18	22	5	7	120		
第I~III 報告計	219	53	57	45	42	85	102	26	25	16	21	49	59	62	63	363		

なんらかの修復処置が施され、口腔機能上活用されていた智歯は、計85歯であった。処置の分類では、金属充填が最も多く計60歯を数え、次いでレジン充填…16歯、他9歯は、冠装着、架橋義歯支台として使用されていたのを知った。

4. 智歯以外の先天欠如、埋伏歯 (表7)

先天欠如は、 $\frac{2}{1}$, $\frac{1}{1}$, $\frac{1}{1}$ 部に各1例あり、埋伏歯は、 $\frac{1}{1}$ 部に3例と、 $\frac{1}{1}$, $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{3}$, $\frac{4}{5}$, $\frac{9}{9}$ 部に各1例をみる他、下顎 $\frac{3}{1}$ 部の1例を数えたものである。

5. 智歯に対する臨床実習中の外科的処置、なら

びに一年間の推移

臨床実習の外科的処置は、表8のごとく、消炎処置を受けたのみで抜去されなかった7歯、消炎処置後抜去された5歯、消炎処置なく抜去された130歯を示している。ちなみに抜去智歯の萌出状態は、上顎における計61歯中、萌出歯…44歯、半埋伏歯…11歯、完全埋伏歯…7歯であり、下顎では計74歯中、萌出歯…14歯、半埋伏歯…36歯、完全埋伏歯…24歯であった。上顎にては萌出歯、下顎では半埋伏歯、完全埋伏歯の抜去例が多いのを見ている。

表3：部位別智歯の傾斜

		近心傾斜 及び水平	垂 直	遠心傾斜	頬舌傾斜	合 計
○		24	117	3	8	152
○		17	128	3	1	149
○		68	70	5	17	160
○		56	89	2	18	165
第 IV 報	上	41	245	6	9	301
	下	124	159	7	35	325
	上下 合計	165	404	13	44	626

第 I 、 III 報	上	132	1178	77	108	1492
	下	741	803	35	39	1618
	上下 合計	873	1981	112	147	3110

大きく一年間にわたる智歯存在の推移は、表9のごとく、実習開始時に626歯を数えたものが、実習中に135歯抜去され、終了時には491歯が残存していた結果を得たものである。

考察および要約

智歯に関しては、歯牙形態⁵⁾、萌出時期と萌出パーセント⁶⁾、あるいは智歯難生⁷⁻⁹⁾、周囲炎から顎炎の惹起など¹⁰⁻¹⁵⁾、種々なる方向からの調査、研究がなされている。

本調査に関連した報告では、東大入学志願者10,039名を対象とした斉藤、尾崎²²⁾の成績で○[○]が全萌出しているもの3000例、≡[≡]全く萌出をみないもの3393例が最も多くみられ、また上下左右歯が対角線的に萌出している場合(○[|]○、|○[|]○)が

表4：根の完成・未完成と萌出状態-1

		完 成				未 完 成				不 明				合 計 ①+②+③
		萌出	半埋	完埋	計①	萌出	半埋	完埋	計②	萌出	半埋	完埋	計③	
○		80	12	19	111	2	3	35	40	0	0	1	1	152
○		89	9	15	113	6	4	26	36	0	0	0	0	149
○		55	41	38	134	0	6	20	26	0	0	0	0	160
○		62	37	40	139	1	8	16	25	0	0	1	1	165
第 IV 報	上	169	21	34	224	8	7	61	76	0	0	1	1	301
	下	117	78	78	273	1	14	36	51	0	0	1	1	325
	合計	286	99	112	497	9	21	97	127	0	0	2	2	626

第 I 、 III 報	上	910	107	214	1231	55	18	133	206	8	6	41	55	1492
	下	640	418	389	1447	17	42	59	118	6	15	32	53	1618
	合計	1550	525	603	2678	72	60	192	324	14	21	73	108	3110

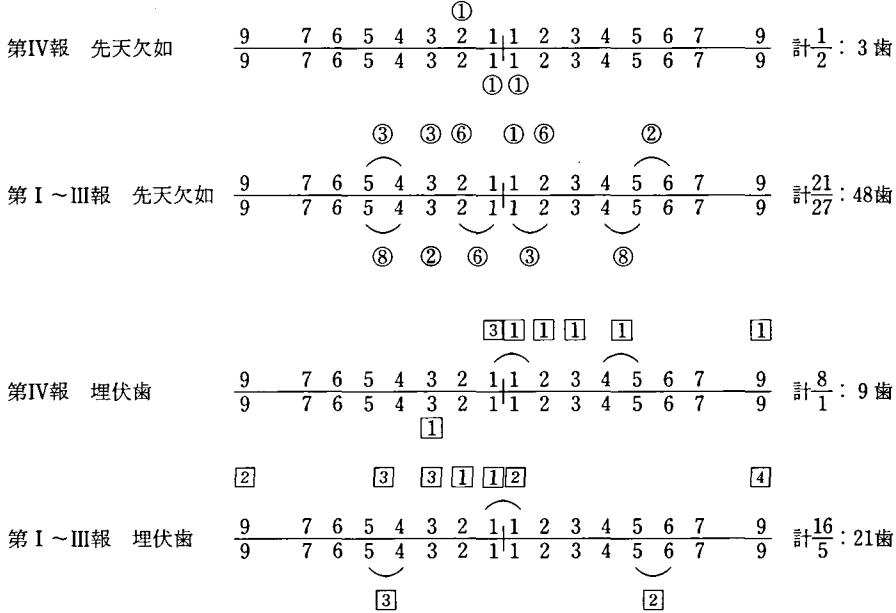
表5：根の完成・未完成と萌出状態-2

第 IV 報	萌 出	286	9	0	295	3
	半 埋	99	21	0	120	
	完 埋	112	97	2	211	46
	計	497	127	2	626	
第 I 、 III 報	萌 出	1550	72	14	1636	4.4
	半 埋	525	60	21	606	
	完 埋	603	192	73	868	24.2
	計	2678	324	108	3110	

表6：保存・補綴処置

	第 IV 報			第 I ~ III 報			第IV報 合 計	第I~III報 合 計
	冠・支台	金属充填	レジン充填	冠・支台	金属充填	レジン充填		
○	2	13	1	10	53	0	16	63
○	3	15	1	13	62	0	19	75
○	3	19	5	17	99	0	27	116
○	1	13	9	17	100	0	23	117
上顎	5	28	2	23	115	0	35	138
下顎	4	32	14	34	199	0	50	233
計	9	60	16	57	314	0	85	371

表7：智歯以外の先天欠如、埋伏歯



第IV報 被検者：266名
第I～III報 被検者：1287名

表8：実習中の外科的処置

	消炎処置(+)と抜歯(-)	消炎処置(+)と抜歯(+)	消炎処置(-)と抜歯(+)
完全埋伏	1 0	0 0	4 3
半埋伏	0 0	0 0	6 5
萌出	4 0	0 0	20 24
小合計	5 0 1 1	0 0 3 2	30 31 36 33
萌出	1 0	2 0	4 8
半埋伏	0 1	0 1	21 14
完全埋伏	0 0	1 1	11 11
第IV報合計	7	5	130

第I～III報合計	33	47	566
-----------	----	----	-----

最も少ない結果であった事、あるいは、下顎智歯を中心に萌出、植立角度に関する河本の分類など、または金森の歯性顎炎原因歯925歯中、智歯が198歯(上顎22歯、下顎176歯)が占められている報告、徳植の、口腔領域でX線撮影を要した疾患中、智歯が最も多数であったとの成績など、古くからのものも多い。また壮丁予備検診者の智歯などの報告^{16,17)}も出されている。青年層に対する智歯萌出

表9 智歯の1年間の推移

	実習開始時	実習中抜歯	実習終了時
	$\frac{152}{160} \frac{149}{165}$	$\frac{30}{39} \frac{31}{35}$	$\frac{122}{121} \frac{118}{130}$
第IV報合計	626	135	491
第I報	1,044	192	832
第II報	1,428	278	1,150
第III報	638	143	495
第I～III報合計	3,110	613	2,477

状態も重視されているらしい¹⁸⁾。

しかしながら、これらの調査報告は、一時点での調査、蓄積された各症例の括めからのものであった。デンタル像による計測の困難さと、同一被検者を診ることの不可能さから、その見解は、限られた範囲を出ていないものである。また上顎のデータも少ない。

私共は、智歯に対する経時的な観察を行うべく、一連の調査を報告してきたわけだが、約一ヶ年間の間隔をおいて歯科学生の智歯がどう変化、推移するかを括めたものである。レ線像でも、デンタ

表10 上下顎左右に一歯のみ萌出している智歯数の構成

○	I~III	IV	計
●○○	10	5	15
●○			
●○○	3		3
●○	4	6	10
○○			
●○	6	1	7
○○			
●○	2	1	3
○○			
○○			
●○	3	1	4
●○	21	4	25
○○			
○○			
○○			
合計			67

○	I~III	IV	計
○○●	12	8	20
○○●	1	3	4
○○●		2	2
○○			
○○●	1	1	2
○○●	16	3	19
○○			
○○			
○○			
○○●	7		7
○○●	2		2
○○			
○○			
○○			
○○●	19	4	23
○○			
○○			
合計			79

○	I~III	IV	計
○○●	9		9
○○●	6		6
○○			
○○●	1		1
○○●	1		1
○○			
○○●	7	3	10
○○●		1	1
○○			
○○●			
○○			
○○			
○○●	38	1	39
○○			
○○			
合計			67

○	I~III	IV	計
○○●	10		10
○○			
○○●	3		3
○○●	2		2
○○●	1		1
○○			
○○●	9	1	10
○○			
○○●		2	2
○○			
○○●	1		1
○○			
○○			
○○●	37	4	41
○○			
合計			70

レ線の上に○のみ存在の萌出歯	25
レ線の上に○のみ存在	40

レ線の上に○のみ存在の萌出歯	23
レ線の上に○のみ存在	40

レ線の上に○のみ存在の萌出歯	39
レ線の上に○のみ存在	67

レ線の上に○のみ存在の萌出歯	41
レ線の上に○のみ存在	59

ルの他、オルソパントモ像を併せ観察し得るし、口腔内カラー写真、石膏模型も容易に参考資料とでき、それらの計測を含めて調査を進めている。

ここに、今回の成績を要約すると共に、前I~III報の結果と比較し、考察を加えてみる。

A) レ線上的における智歯の存在状態は、○○○のごとく全歯をみるものと、≡が全く認められない例が最も多く、これに反して○○○、○○○のごとく対角線的にあるもの、および○○○、○○○と片側上下にあるものが少ない傾向は変わっていないのを知った。

これらの成績は、前報における○○○…407例、≡…174例が多く、○○○…130例、○○○…84例が目立ったこと、ならびに○○○…14例、○○○…20例、○○○…19例、○○○…25例が少ない傾向と同様である事を知った。

…19例、○○○…25例が少ない傾向と同様である事を知った。

B) 萌出智歯の部位別存在

レ線像上の智歯、計626歯(○…152歯、○…149歯、○…160歯、○…165歯)の萌出状態は上顎では58%を占める萌出度を、下顎では36%の完全萌出を見ている。すなわち下顎では半埋伏、完全埋伏が多くみられた。この成績は前報の計、上顎萌出65%(1492歯中973歯)、下顎における41%(1618歯中663歯)の萌出と同様であった。

しかしながら、レ線像上の各部位に多く存在するものが比較的多数発現するとは、一概に言及しがたいものがあり、各歯牙の存在と萌出は必ずしも平衡していないのを知った。たとえば、上下顎

左右に一歯のみ萌出している智歯数の構成は(表10), \bigcirc …計67歯 (\bigcirc …15歯, \bigcirc …3歯, \bigcirc …10歯, \bigcirc …7歯, \bigcirc …3歯, \bigcirc …4歯, \bigcirc …25歯), \bigcirc …計79歯 (\bigcirc …20歯, \bigcirc …4歯, \bigcirc …2歯, \bigcirc …2歯, \bigcirc …19歯, \bigcirc …7歯, \bigcirc …2歯, \bigcirc …23歯) \bigcirc …計67歯 (\bigcirc …9歯, \bigcirc …6歯, \bigcirc …1歯, \bigcirc …1歯, \bigcirc …10歯, \bigcirc …1歯, \bigcirc …39歯) \bigcirc …計70歯 (\bigcirc …10歯, \bigcirc …3歯, \bigcirc …2歯, \bigcirc …1歯, \bigcirc …10歯, \bigcirc …2歯, \bigcirc …1歯, \bigcirc …41歯)のごとくバラツキが目立った。ただ, 上下左右のレ線上一歯のみ存在する例の萌出は, \bigcirc 部で40歯中25歯, \bigcirc 部で40歯中23歯, \bigcirc 部で67歯中39歯, \bigcirc 部で59歯中41歯と, なぜか萌出が多く, 62.5%, 57.5%, 58%, 69.5%の発現をみている。

C) 萌出の程度と根の完成, 未完成の関連については, 萌出歯に約3%の未完成を, 完全埋伏歯に約46%の未完成をみる結果を得た。

これは前報までの計, 萌出歯の根未完成, 約4.4%(1622歯中72歯), 完全埋伏歯の根未完成24%(795歯中192歯)の成績と同様, 完全埋伏歯に根未完成のものが多くに変わりはないが, 46%:24%と今回調査で根未完成がほぼ倍増している結果を示している(表5)。

D) 上下顎における智歯の近心傾斜および水平と, 垂直方向を計測した結果は, 近心傾斜と水平を示すものは下顎に多く, 一方, 垂直方向は上顎に多かった。この成績は, 前報の近心傾斜と水平が, 上顎135歯に対し, 下顎741歯を示したこと, また垂直が上顎1178歯に対し, 下顎803歯であったことと同一傾向であった。なお, 柳沢¹⁹⁾, 河本⁴⁾, 松島²⁰⁾, 飯島²¹⁾らも, 本調査の下顎智歯傾斜と同じ傾向を報告している。

E) 智歯に対する修復活用状況は, 金属充填, 冠装着, および支台歯, レジン充填の順であった。626歯中, 萌出, 半埋伏の計415歯, うち85歯(上顎35歯, 下顎50歯)が処置されているわけで, ほぼ20%に当る。前報までの成績で, 3110歯中, 萌出, 半埋伏の計2242歯, うち371歯(上顎138歯, 下顎233歯)が, すなわち, ほぼ16%が処置されている結果にくらべると, 智歯処置がやや増加しているようである。ちなみに前報までの萌出歯2242歯中にみられなかったレジン充填が, 今回415歯中に16歯(上顎2:下顎14歯)認められたことは注

目すべきであろう(表6)。

F) なお, 智歯以外の先天欠如は, 今回調査では, \bigcirc , \bigcirc , \bigcirc 部に各1歯をみたが, この成績は1.1%に当たっている。前報までの先天欠如の計48(\bigcirc 部…3歯, \bigcirc 部…16歯, \bigcirc 部…2歯, \bigcirc 部…8歯, \bigcirc 部…11歯, \bigcirc 部…8歯)歯, 1287名中3.7%の成績よりやや少ない結果であった。

一方, 智歯以外の埋伏歯(過剰埋伏を含む)は今回の \bigcirc 部…6歯, \bigcirc 部…1歯, \bigcirc 部…1歯, \bigcirc 部…1歯, 計9歯の出現は, 前報における計21歯(\bigcirc 部…2歯, \bigcirc 部…3歯, \bigcirc 部…7歯, \bigcirc 部…4歯, \bigcirc 部…3歯, \bigcirc 部…2歯)に比し, 3.3%:1.6%と, やや多く発現していた(表7)。発現パーセントはともかく, 先天欠如は22歯:29歯と下顎に多く, 埋伏は24歯:6歯と上顎に多い傾向には変わりはないものである。

結 語

歯科臨床実習学生における智歯の萌出状態, その他と, 一ケ年の経日的推移を昭和52年度よりの調査成績と比較し検討した結果,

1. 智歯存在の部位別16組合せと, 萌出状態で, \bigcirc のごとき全歯存在と全歯萌出と, \bigcirc 全歯欠如が多く認められ, これに対し, \bigcirc , \bigcirc と対角線上に位置する例, あるいは \bigcirc , \bigcirc のごとき, 同側上下顎にあるものは少なかった。

2. しかし, レ線像上の智歯存在(萌出, 半埋伏, 埋伏歯を含む)と, 萌出状態は全く平衡を欠きバラツキが明らかに示されている。ただ, 上下左右のレ線上一歯に多萌出を見た。

3. 萌出歯における歯根の未完成度が, 前報まで4.4%, 今回第IV報で, 3%と差が少ないのに対し, 完全埋伏歯の根未完成が, 前報までの24%に比し, 第IV報の計で46%と根の未完成が多くなっているのを知った。

4. 智歯の植立は, 上顎に垂直方向が多く, 下顎に近心傾斜および水平を多くみており, 前報までの傾向と同様な結果をみている。

5. 智歯の修復活用は, 前報にくらべ, やや多くなり, 特に従来みられなかったレジン充填の16例を数え得た。

6. 智歯以外の先天欠如は, 前報までの計で3.7%を下まわり, 1.1%と少ない発現をみ, また智歯以外の埋伏歯をくらべると, 前報までの計で,

1,287名中21歯に比し、266名中9歯とやや多く発現していた。

7. 前報までの成績で、3,110歯の智歯が臨床実習期間中に613歯(19.7%)抜去され、今回の成績では、626歯のうち135歯(21.6%)が抜去されていた。歯科大生の実習という環境にあっても、消炎処置なしの抜去が135歯中130歯におよんでいることは注視したい。

ちなみに、前報までの計では、垂直方向智歯64%(1,981歯/3,110歯)、今回でも垂直方向の智歯が65%(404歯/626歯)を占めていた成績を得ている。

文 献

- 1) 藤田 研, 佐藤 透, 徳植 進 (1984) 歯科大学臨床実習生における智歯の存否と萌出状態 第I報. 歯界展望, 63: 1381-1390.
- 2) 徳植 進, 佐藤 透, 藤田 研, 賀数 恵, 萩原健, 青木嘉之, 柳原健司, 川上清明, 伊藤良彦, 日野 理 (1983) 歯科臨床実習学生における第三大臼歯の推移について 第II報. 松本歯学, 9: 168-173.
- 3) 高木正男, 小坂橋夕子, 畠山寛彰, 榎原守一, 松井昭樹, 河田直彦, 市野澤宏志, 波井公滋, 伊藤良彦, 川上清明, 柳原健司, 青木嘉之, 萩原 健, 賀数 恵, 中村 亨, 藤田 研, 佐藤 透, 上條竹二郎, 内田栄三郎, 徳植 進 (1985) 歯科臨床実習学生における第三大臼歯の推移について 第III報. 松本歯学, 11: 215-221.
- 4) 河本健司, 小林敏郎, 宇根敏行 (1962) 下顎智歯萌出角度のレ線学的分類. 日口外誌, 8: 32-35.
- 5) 酒井琢朗 (1981) 人類の進行と智歯. 歯界展望, 58: 615-623.
- 6) 河西秀智 (1959) 日本人における智歯の統計的観察, 智歯の出現, 発育, 萌出の時期と頻度について. 口病誌, 26: 463-478.
- 7) 上條彦彦 (1972) 日本人永久歯解剖学, 173-184. アナトーム社, 東京.
- 8) 井上直彦 (1980) 人類における歯と顎骨の不調和. 人類誌, 88: 69-82.
- 9) 山下佐英 (1981) 智歯の症候論. 歯界展望, 58: 625-631.
- 10) 金森虎男 (1949) 歯口顎疾患, 106-126. 学術書院, 東京.
- 11) 徳植 進 (1961) レ線撮影を要せし口腔内疾患の総括的観察. 口科誌, 10: 272-273.
- 12) 赤松英一, 川島 康, 徳植 進, 今井忠治訳(1980) 口腔診断学/オーラルメディシン, 462-465. 書林, 東京.
- 13) 徳植 進 (1967) 東北大学医学部歯科における入院手術例の概括. 口科誌, 16: 198.
- 14) 松井儂行(1956)下顎智歯周囲炎に関する研究 第1編 下顎智歯周囲炎の臨床統計観察. 岡山医学会誌, 71: 6187-6196.
- 15) 徳植 進 (1984) 歯科臨床の実際 第1編 総合診断学, 67-68. 文京書院, 東京.
- 16) 中留金蔵 (1928) 壯丁ニ於ケル智歯發生竝ニ齶齒ノ状況. 軍医団雑誌, 207: 1431-1440.
- 17) 山田 茂 (1940) 壯丁豫備検診に於ける齶齒發生竝ニ智齒萌出状況に就て. 臨床歯科, 12: 644.
- 18) 齊藤 熙 (1936) 第三大臼歯ノ發育ニ關スル「レントゲン」線學的研究 第二編 第三大臼歯ノ發育ニ關スル研究(其ノ三). 口病誌, 10: 502-514.
- 19) 柳沢 融, 中里 紘, 小川邦明, 藤 幸雄(1970) 下顎智齒の萌出角度に関する X 線学的観察. 歯科放射線, 10: 43-48.
- 20) 松島 税, 角田豊作 (1950) 下顎智齒の觀察, 其の1 X線像に依る出齶角度. 齒科医学, 14: 196-200.
- 21) 飯島三郎 (1977) 下顎第三大臼齒の植立状況による同齒牙および第二大臼齒の齶蝕發現部位の X 線学的考察. 松本歯学, 5: 139-149.
- 22) 金森虎男 (1949) 歯口顎疾患, 68-78. 学術書院, 東京.